
宗教心理学研究会ニューズレター

第7号 2007.9.18

宗教心理学研究会

Society for the study of psychology of religion

目次

特集1:他の研究分野から見た宗教心理学とは	-----	1
〇〇心理学としての宗教心理学:心理学史から見た宗教心理学	----- 荒川 歩	2
仏教学から見た宗教心理学	----- 太田俊明	3
教育心理学からみた宗教心理学	----- 辻本 耐	5
神学から考える宗教心理学	----- 中野美加	6
心理臨床から見た宗教心理学	----- 森 真弓	7
特集2:自らの研究のあり方を考える	-----	9
ブルース,足りていますか?	----- 佐藤壮広	9
仏教思想『唯識論』から深層心理での認識の本質を考察する	----- 山田弘司	12
事務局からのお知らせ	-----	14

特集1:他の研究分野から見た宗教心理学とは

宗教心理学研究会では、宗教心理学を主専攻としているよりも、それぞれの主専攻を持った上で宗教心理学に携わっている(関心を持っている)会員の方が多いと思います。

今回、このことに注目して、「主専攻からどのように宗教心理学を見ているのか(考えているのか)」について、会員の皆さまにご執筆いただきました。

〇〇心理学としての宗教心理学：心理学史から見た宗教心理学

荒川 歩(名古屋大学)

心理学には、様々な〇〇心理学がある。社会心理学、臨床心理学、発達心理学、感情心理学、青年心理学、人格心理学。宗教心理学もその一つであるといえよう。しかし宗教心理学をめぐる状況は、前述の〇〇心理学たちに比べて厳しい。このことを、杉山(2001)は、「日本では宗教心理学は心理学の下位分野として広く認められているとはいえない」、「宗教に関連した論文や学会発表が見られても、それは宗教を研究対象とした社会心理学や教育心理学や何やであって、宗教心理学とは認知されないのがむしろ普通である」、(歴史的に宗教心理学的研究は)「さほど多くの研究を輩出しておらず、現在では忘却の淵に沈んでいるものが大半かもしれないが・・・確かに存在したのである」と表現している。もちろん、このような分野は宗教心理学だけではない。しかし、全く日の目を見ない〇〇心理学が多い中で、研究が断続的ではあれ続く日本の宗教心理学は、心理学史的視点から見て非常に興味深い存在である。なぜこのような状況に宗教心理学があるのかを、①パトロン、②方法論的独立性、③研究が行われる背景、の3点から整理してみよう。

第1は、パトロンである。多くの学問的分野には、パトロンが存在する。パトロンは具体的な人である必要はないが、〇〇が分かるとこういう役にたつという社会的有用性のアピールがあり、それに対する社会的需要/受容があるならば、研究は途切れなく継続

的に進むだろう。しかし特に日本の宗教心理学は、一部の例外を除いてそれが持ちにくいのではないだろうか。宗教に対して抑制的な研究には、ある程度の需要が見込まれるが、促進的な研究、すなわち、こうすれば宗教者にメリットがあるという研究は、(そのような研究風土の是非は別に積極的に論じられるべきであるが)現状では受け入れられにくいと思われる。

第2は、方法論的独立性の不在である。松本(1979)他が、宗教心理学の方法論を整理しているが、宗教心理学独自の方法論や思考様式、視点を形成しているというよりも、(宗教心理学に限ったことではないが)その時期その時期の主要な方法や思考様式、視点を宗教を対象に応用していることが多い。そのため、宗教心理学は、心理学の一分野として独立性を主張するのがやや難しく、かつその必要があまりないのではないだろうか。

第3は、研究が行われる背景である。研究を行う理由は3つに分けることができる。第1は学範的理由(先行研究から〇〇をあきらかにする学問的必要性がある)、第2は社会的理由(社会的に〇〇について広く関心が持たれ、明らかにすることが求められている)、第3は私的理由(研究者個人の人生において、そのことを明らかにしたい)である。前述のように、宗教心理学は、社会的理由をつけ辛く、学範的理由も(視点の独立性の問題から)つけづらい。しかし、私的理由は

抱負にある。心理学史を見ても、宗教心理学に関心を持つ研究者には宗教者や信徒が少なくない。元良勇次郎も洗礼を受けていたし、飯沼龍遠や力丸慈円も宗教者であった。私的理由というと一見印象が悪いかもしれないが、それは、共感する人を中心に社会的に開いていく可能性を示しているともいえる。

私の個人的な意見で言えば、前述の〇〇心理学たちのように、学問的に心理学の一

下位分野として存在することが絶対的によいと考える必要は必ずしもないと考えている。しかし宗教心理学に可能性を感じる者としては、宗教心理学が他の分野とは異なる独立した方法論・思考様式・視点を持つ方向も考えたいし、社会に対して開いていくことも期待したいと思っている。宗教心理学は他の〇〇心理学に何を与えることができるだろうか。

仏教学から見た宗教心理学

太田俊明

「五十代は鼻たれ小僧」といわれる分野で若輩者かつ無知な自分がこのタイトルでコメントすることに、正直恐縮し戸惑いつつ…。教団内を振り返って見れば伝統的宗乗のみを唯一とみなし、周辺の分野を拒絶しかねない状況がある一方、仏教学は文献学・仏教文化・インド学・教化(伝道)学など余りにも幅広く、一言で語ることは不可能です。ただ一つだけ言えることは極めて長期に亘って表現は違えども「仏の教えに出遭うことよって心意識がひるがえり生き生きと生かされる」こと。仏は今も多くの存在を救い続けている、それを体系化することではないでしょうか。

また、自分の興味・関心も「仏教との出遭いを通じて生かされている意義の探求」即ち「今生かされているいのちとはなにか」に尽きるのです。そこから「一例を挙げれば」自殺問題やいじめ、更には死後の世界の問題

に対し仏教がどのように役に立つのか…。ストリートレベル(現場)の僧侶として、また研究にかかわるものとして当事者かつ第三者である必要を感じながらも、つつい感情に対応してしまい「未熟だなあ」と感じる日々が続きつつ…。宗教心理学に接点を持つようになったきっかけをもって、本題について感じることを述べていきたいと思います。

受験戦争で疲れた自分は仏教学を通じて苦しみを解決できる糸口がつかめるのではないかと淡い期待を持ちました。それで仏教学科に入学したのですが、講義を聴いて愕然とし、混乱しました。というのは教義教学が中心であり、現場の苦しみ、今生きている人の苦しみに直接答えられていないのよう受け止めたから。確かに教義教学に関する学問も必要です。現存の宗派は教義教学なしには成立しませんし、儀軌や儀礼も必ずしも直接的ではなくても成立が困難になると

考えられる一面があります。しかし、社会があつてこそ、この存在があつてこそ法(仏教の教え)が戴けるのではないかと。

それゆえ、単なる教義研究や表面的な儀礼的慣習ではない真の意味での仏教とは何か模索する日々が続く、その結果カウンセリングと出会ったのです。カウンセリングの場の経験を通じて「仏教とカウンセリングは焦点化出来るのではないかと」この直感が自分をカウンセリング、仏教カウンセリング更には宗教心理学の世界に向けさせたのです。

言い換えるなら、カウンセリングをきっかけにして、仏教が(心理療法・カウンセリングといった)他分野に対して大いなるつながり、有限なる可能性をもつと確信することになったと言っても良いのです。

仏教カウンセリングを提唱された藤田清先生は「仏教はカウンセリングそのものである」と言い、仏教は本来臨床心理的な実践を仏教は行っていたとおっしゃっています。また、近年のヨーロッパの仏教徒の流れもこれに近いものがあるように見受けられます。

さて、実際現場の僧侶として儀式・儀礼にかかわり、これに沿った生活を行うようになってきますと如何に儀軌を執行するかにウエイトが置かれてきます。そうすると、心の余裕がなくなり、心理学を生かそうとする状況ではなくなってしまう。儀軌・儀礼の背景にある心理的影響はなにか、心理的効果を計るための工夫をどのようにすればいいのか。布教・教化の現場でどのように活用していくか等々、とある大遠忌の法要のように演出に依存するだけでなく、日常の教化

含めさまざまな課題はあるのですが…。また「仏教＝こころ＝心理」というとらえ方にも疑義を感じています。仏教は心理学だけではなく様々な学問の源泉であり、こころは心理的側面だけでなく身体的な側面・霊性的側面ほか社会的な側面等々からもっと語られてもいいのではないかと思えるからです。それにつけても仏教と心理学・心理療法に関する論考を見る機会は、少し増えてきたとはいえ、あまり多くなく、大教団ならともかく中小教団に所属している人は更に見る機会が少ないと言って過言ではありません。

仏教と心理学・心理療法はそれぞれが分断され、対立しているものではありません。心理学は文理融合の科学であり、仏教も医学・心理学・社会学等に影響を及ぼし本来の姿は(現在の布教・教化)より実践的ではなかったではないでしょうか。

宗教心理学研究会…宗教心理学に期待することは宗教を単に第三者的に見るだけではないストリートレベルでの積み上げを宗教学側からも心理学側からも(方法論は違えども)行っていくこと。同時に宗教と科学の接点・焦点の探求を続けていくこと。そこから一定の成果が見出され現場に還元できていければありがたい限りです。また同時に、自分も関わり続けていきたいと考えているとともにご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(本稿は仏教、特に現場の立場から書いたものであり、他の宗教に対し偏見の意図はありません。また認識違いの所も有るかと思いますがこの点ご了承下さいませ。)

教育心理学からみた宗教心理学

辻本 耐(大阪大学大学院)

この度、「教育心理学からみた宗教心理学」というテーマをいただきました。誠に僭越ではございますが、個人的な体験を交えながら、教育心理学を専攻する私がどのように宗教心理学をみているのかについて、少しばかり述べさせていただきます。

既にご存知とは思いますが、教育心理学とは、学ぶ主体である人間と教育との関わりを心理学的観点から追求していく学問です。また、宗教心理学をはじめとする心理学の諸領域においてもあてはまることですが、一口に心理学的観点といっても、発達やパーソナリティという観点、認知・思考・記憶などを含んだ学習過程という観点、いじめや不登校、ストレスといった臨床的な視点、学習プログラムの効果や学力・知能などの測定・評価といった多様な側面を含んでいます。

このような領域を専攻しているためか、私から宗教心理学をみた場合、教育という視点が加わるため、個人的には宗教による価値教育(宗教教育)というトピックに関心をもっています。しいていうなら「教育心理学的宗教心理学」といったところでしょうか。もちろんこういったテーマについては、教育に宗教を持ち込むことへの一般的な忌避感などからあまり受け入れられているとはいえません。しかし、2002年に全国の小中学校に配布された「心のノート」に宗教的な記述が記載されていることや、2006年に改訂された教育基本法において「宗教に関する一般的な教養」を尊重すべきであるとあえて付け加え

られたことなどから、教育内の宗教を取り巻く状況が徐々に変化してきているように感じています。そういった点からも、今後、教育というフィールドにおいて宗教心理学が注目されていくと考えられます。

また、教育という視点から宗教心理学をみることによって、自分の調査・研究に社会的意義を見出していると思います。本研究会の過去の研究発表会においても「社会的寄与」というサブタイトルがついていましたが、いかにして社会の要請に答えていくかという視点は宗教心理学にとって重要であるとともに、宗教というテーマの中でそれを見出していく難しさもあります。先程、関心領域は宗教教育であると述べましたが、既成仏教教団の僧侶という私の立場上、調査・研究を行う際の中心には必ず「宗教」が存在しています。そのため、以前に信仰をテーマにした調査を行いました。その結果を一般化し、そこに社会的意義を見出すことに大変苦勞しました。もちろん、研究者コミュニティに貢献することも重要ですが、社会との接点を積極的にもつという視点は、私にとってとくに重要な意味があります。

過去に私は、所属する仏教宗派の教学を学ぶため仏教系の大学院に通っていました。大学院に入学した当時は、仏教が社会の要請に十分応えうる宗教であると、その可能性を信じ期待に胸を膨らませていました。しかし、教学を学ぶにつれて、教条主義に陥り、形骸化した教学に疑問を抱くようになり

ました。今思えば青臭い考え方だと思いますが、その頃に「宗教の存在意義とは何であるか？」というリサーチクエスチョンが芽生えたのだと思います。そして、私は、この「宗教の存在意義」が自分の調査・研究における社会的意義に通じていると考えています。そのため、社会的意義を見出しやすい教育という視点を媒介変数として、それらをつないでいるのです。

個人的な内容に偏ってしまいましたが、近

い将来、既成の宗教にとって大変厳しい時代がやってくるであろうと予測されます。そういった時代の中で、宗教心理学や教育心理学という視点が重要な役割を担うと考えています。宗教の当事者である私が、調査・研究の中で宗教や教育といったものをどこまで中立に扱えるか課題ですが、これからも研究会の諸先生方からご教示いただければ幸いです。

神学から考える宗教心理学

中野美加(同志社大学大学院)

筆者は修士まで人間科学部に在籍し日本人の死生観について研究してきたが、一般的な日本人と日本人クリスチャンの死生観の違いの大きさに改めて気づかされてきた。日本人でありながら違う死生観をもつということは、民族的アイデンティティと宗教的アイデンティティをある程度自らの中で統合しているはずである。そうでなければ、自身の死に直面した時かなりつらい事になる(と思う)。そのような人たちの死生観については神学的な分析が不可欠ではないかと思い、神学研究科に在籍する事となって今年で二年目になる。

神学研究科に入ってみて痛感するのは、やはり学問の始まりから人間と付き合いのある神学の懐の深さと、近代社会における、つまり世俗化が進んだ社会、特に一見「無宗教社会」の日本におけるリベラル派の悩みの深さである。もちろん日本だけではな

い。諸外国においても福音系の大躍進に比して、リベラル派の衰退ぶりは顕著である。ただ日本では「信仰」についての周囲との理解の違いからキリスト者は二重の重荷を負っているかもしれない。リベラル派に属するクリスチャンたちは「初詣でに行かない」「七五三を祝わない」「お位牌がない」おかしな「人たち」について、あえて理解してもらおうという努力をしてこなかった。むしろ適当に周囲に付き合っただけで何とかつじつまを合わせ、余計なストレスをため込まないようにしてきた。その付けが今まわってきているような気がする。

さて心理学が「長い過去を持つが、短い歴史しか持たない」(H.Ebbinghaus)学問とすれば、神学は長い歴史も過去も持ちながら、それが新しい歴史にぬりかえられる事なく、常にその長い過去と歴史を引きずりながら新しい歴史を歩んでいかなければならない運命

を背負っている学問である。心理学は科学（あるいはevidence）と共に歩むものだが、神学も科学に背を向ける事は出来ない。むしろ医学関係等での倫理問題では「科学」とは積極的に関わっていかなければならないのだが、共存するには常にリスクが付きまとうのである。神学と科学は学問の当初から共に歩んできたにもかかわらず、現在では一見すると全く違う領域であるような感すら覚える。

神学事典（ハリソン、エヴェレット他編、1972年、いのちのことば社）で「宗教心理学」の項を見てみると、20世紀における宗教心理学と神学の関係をお互いの認識不足から「田舎無神論者と田舎説教者との関係」（p292）とあまり変わらないものだったと書かれていた。21世紀になってから宗教心理学を志した者の目には、そういう時代はもう過ぎ去ったと思えるがどうだろうか。しかし理解しあ

っていると異なりがたい。ムード的には非常に近いものを感じることもあるためか、神学の分野では心理学用語と頻繁にお目にかかるが、首を傾げたくなる事も度々である。翻って心理学者が聖書や神学の歴史上人物を取り上げた研究は、必ずしも神学的に神学者たちを納得させてはいない。実証的研究はもっと理解されていないといっていだらう。ではそれぞれが勝手にやっていて各々満足していればそれでいいのだろうか。それが神学生二年目の筆者の今の課題である。

研究課題が近接している割に、スタンディングポイントが相当に違う二つの学問を統合する事が出来るのだろうか。まだ答は見出せていないが、軸足を神学に置く事にした者としては、護教的視点に陥らないように批判的なコンテキストの中で課題を追及していく事に留意したいと思っている。

心理臨床から見た宗教心理学

森 真弓

《あれから4年……第1回研究発表会参加（と第1号ニューズレター投稿）からもうそんなに経ってしまいました。修論提出から臨床心理士資格認定試験、さらに新たな臨床現場を幾つか駆け巡る日々で、その間、どの研究発表会にも出られず、ニューズレターをじっくり読む余裕もなく過ぎてきました。今回、「心理臨床から見た宗教心理学」というテーマを頂き、常々心には留め置きながらご無沙汰をしてしまっていた宗教心理学と多

少なりとも向き合えたこと、この機会を与えて頂きましたことに感謝しています。また、これまでのニューズレターを読むと、私のような'ご無沙汰者'にも(きっと新来会者にも)研究会の動きの輪郭がクリアに分かり、改めてニューズレターの価値を痛感しています。そしてまた改めて、この会の発足にご尽力された松島さんや西脇さんの発想・努力・ご苦労・お働きの継続に敬意を表したいと思えました。》

現在私が臨床現場で課題だと感じていることは、“子どもが育つ条件として「母なるもの」がどれ程に重要であるか”という事と、その事を、子どもを取り巻く大人にどう伝えるかという事です。

教室には入れないけれど相談室には来られる子どもにとって、相談室やスクールカウンセラーは安全基地として機能しています。しかしまだ多くの教員が、相談室に来られるなら教室にも入れるはずだと子どもを追い立て、子どもたちが育つために、その内なる世界に「母なるもの」の補充が必要であることが理解できません。あるいは学校が「母なるもの」を提供する必要はないと考えているのかもしれませんが。

また、児童養護施設の職員が「家庭の代わりは出来ない。施設は職員にとって会社と同じ」と公然と発言するのを耳にします。確かに、国の予算が削られ労働条件も養育環境も厳しくなっていますし、被虐待児が増えていることの難しさもあることでしょう。

しかし、教育も福祉も、もっと根源的な事柄——人間が人間であることの意味や、子どもが育つ条件としての「母なるもの」——を見つめなければならぬ時だと、私は思っています。そういう声を大きくしていきたいと思えます。

宗教というものの根源にも「母なるもの」への希求があると言われる。エリクソンE. H.の『青年ルター』、西平直氏の『エリクソンの人間学』等は熱く読ませて頂きました。宗教心理学では、私個人は精神分析の視点(対象関係論やユング心理学も含めて)からの探求にとっても興味があります。「母なるもの」の希求が宗教(宗教意識)と心理臨床の

接点のように思えます。

精神分析理論やその心理療法は実証性(効果測定含め)に難がありすぎると顔をしかめる人もいます。実際、私の院では、「発達心理学VS.臨床心理学」という空気がありました。宗教心理学(研究会)においても、実証性ということが大きなテーマとして横たわっていることは、私のようなご無沙汰者にも十分伝わってきます。ニューズレターにて、研究の方法論や研究者の恣意性、言葉の概念や言葉が使われるコンテキスト等についての諸先生方の御討論を拝読させて頂きました。

臨床現場でバタバタしていて研究から遠ざかっている私は、緊張感と同時に正直言いようのない疲弊感を感じました。「宗教心理学って難しいんだなあ、どれだけ学んだら先生たちの言っていることを理解できるようになるのだろうか?」といった焦りだったのかもしれませんが。しかし、再度読み直した時には整理可能な部分が見え、「『宗教心理学』と聞くとなぜか血が騒いでしまう」という安藤泰至先生の言葉(第5号p22)に深く頷いている自分は、やはり宗教心理学に期待するところが大きいのだと思いました。

「個人の生(life)と切りはなさないという立場において」(森岡正芳「臨床心理学と宗教心理学の接点」、『宗教心理の探求』IV部2章、東京大学出版会、p330)、「社会の現状から遊離しない」(齋藤先生、第5号p12)とところで、「パーソナリティの宗教的な次元や傾向性はパーソナリティの根っこにあるものなのか」という問題に接近できる」(森岡先生、第6号p7)のではないかというのが私の本音であり、この研究会のどなたかが(あるいは

皆が), その方法を探し研究成果を見せてくれると期待しているのです。

そしてその研究と知見が, 子どもが育つための「母なるもの」に通じる道筋を照らしてくれることを, 学校現場や福祉現場の大人の意識改革に貢献してくれることを願っています。

ます。宗教心理学という学が心理学の世界で広く認知され, 更に広い範囲で影響力を持っていくことを楽しみにしつつ, 私も自分に出来る研究・活動を探していきたいと思いません。

特集2: 自らの研究のあり方を語る

特集2では, 2人の会員の方に「自らの研究のあり方を語る」と題してご執筆していただきました。他分野の研究を知る良い機会であると思いますので, 今後もこの特集を組んでいきたいと考えております。

ブルース, 足りてますか?

佐藤壮広

2004年ごろから, 非常勤で担当している講義で, 自作のブルースをシャウトしています。講義といっても, 「音楽・芸術論」や「自己表現論」など, 最近流行りの科目を担当しているわけではありません。「異文化交流論」(一橋大学)や「文化人類学」(大正大学), 「マイノリティと宗教」(立教大学)など, 一般的な講義です。なぜ, ブルースのシャウトか。その目的を一言でいえば, 「他人の痛みが聴ける耳を作る」ためです。アコースティック・ギターで, ジャーン「佐藤です。今期, ひとつよろしく!」と, スロットル全開でメッセージを学生へぶつけます。しかし, ブルース・シャウトを始めた当初から, そんな調子だったわけではありません。

私事になりますが, トホホとしか表現できない離婚の体験を, 数年前にしました。ミッ

シオン系大学で訓練を受けた私は, 真の「他者理解」とか「全人的交わり」, 「我と汝」などといった人間関係の軸から大きく逸れてしまった自分を, どうにも受け入れられない時期がしばらく続きました。重苦しい感情を抱え, 丸一年は池袋にあるキャンパスへは行けませんでした。その間, 学生時代から馴染んでいた黒人ブルースやソウルのCDを, あらためてゆっくりと聴きなおしました。ブルース・スケール特有の, 感情の奥にじわりと苦味と少しの心地良さを残すメロディが, ストレートな歌詞とともに, 私のからだに沁みこんでいくのが分かりました。痛いことをそのまま「痛い」と言うのも大切です。加えて, 痛いことに自分がどう対応するのかを言葉にし, 置かれた状況を笑い飛ばし, はたまた泣き叫んだり, 時には怒ることも, 自分を肯定して目

の前のことに向き合う上で必要な作業です。表に出ないながらも、私の内的な葛藤はしばらく続きました。

いろいろな不安や自分の身の上のトホホに向き合いつつ、ふと気がつくと、ギター片手に講義で歌っていました。曲は、「非常勤Blues」という自作品です。

♪先生いつも どこにいるんですか？
♪訊かれるたびに こう返すんだ
♪俺はいつも お前らの目の前だ
♪Oh非常勤ブルース ひとコマなんぼの俺の生活

[非常勤Blues／佐藤壮広]

非常勤・兼任講師の経験がある方ならば、「先生の研究室は何号館ですか」などと学生から質問を受けたことが、一度はあるはずです。この問いかけに、私は上の歌で答えることにしています。不意な学生の質問との対面、つまり＜コンフロンテーション＞と、それへの対応＜インプロヴィゼーション＞の力が、ブルースの魅力の一つです。自身をとりまく状況は簡単に変わるものではありません。でも、それとどう向き合うかの構えを、ブルースの世界は教えてくれます。その構えが、今の自分にとっては「シャウト」です。ただし、シャウトとは言っても、決して声を張り上げることでなく、自身の裡に向き合い、それを少しいから外へ出してみるという意味です。誰でも、シャウトの種の一つや二つは抱えて生きています。それを自身の裡にまず認め、出してみなければ、他者のシャウトの種や痛みを感受できる人間にはなれないと、私は考えます。

「マイノリティ」について学ぶ際にも、彼らの精神文化、表現のかたちに心身を向けることが、もっともっと重視されてよいのではないのでしょうか。マイノリティの定義や社会や世界の抑圧構造は、十分に理解されるべきだし、解決していくべき課題です。しかし、痛みを聴く耳を持たなければ、学びの意義は半減してしまいます。マイノリティという構図に置かれている人たちは、歌、踊り、芸能などを通して自身を表現し続けてきました。そこに発揮されている、痛みや苦境に向き合う「人間の力」にもっともって焦点を当てて、人間の表現活動の深みを理解することができるのではないのでしょうか。痛みは、除去できるものとは限りません。例えば宗教や信仰の世界は、その痛みを前にして、われわれがどのようにインプロヴァイズするかという知恵を、じつに濃厚に提示してきたといえます。宗教や信仰という言葉でなくても、人間にはそうした「力」が備わっていると考える。その力を引き出してくれる一つの世界が、ブルースミュージックだと考えるのです。

例えば立教大学での担当科目「マイノリティと宗教」ではまず、黒人史の概説をしつつ、各時代状況に重なるブルース作品を聴いてもらいます。後半では、学生に自身の裡にあるブルーな感情、葛藤、やきもきする状況、トホホな出来事などを表に出してもらいます。それを私は、「自分詞作成ワーク」と呼んでいます。ブルースの歌詞に見られる「A-A-B」という3連の詩のスタイルを基本として、シャウトしたい現状を表に出し(A-A)、それへの対応あるいは更なるぼやきの声など(B)を詞に表現する。例えば、以下のようにです。

♪4月からやっとならばよかった就職活動
♪4月からやっとならばよかった就職活動
♪コンスタントにやっていたのは ああコン
パだけ….

[就活ブルース／立教大生]

学生は、この詞によって就職活動の辛さや焦りを嘆きつつ、友達とその感情を共有しながら、自身の就職活動にあらためて向き合うようになります。実際に職が決まるかはもちろん別の問題ですが、この自分詞は現状に向き合う構えを作るよう促してくれます。

この自分詞ワークを行う講義は2007年前期、履修登録学生数が840を越えました。講義について、趣味の音楽をネタにして教員が好き勝手にやっていると揶揄されているのも知っています。また、講義の意図を理解できない学生も何人かいるのも事実です。教員がギター片手に「非常勤ブルース」だなんて、大学のカリキュラム編成部署や教務課そして学生たちが想定する「大学の講義」の範囲にはありません。しかし少なくとも学生たちは、自分詞作成を行う段になってようやく、ブルースの世界が自身の日常とつながっているということを理解します。最後の1～2コマは、学生たちの自分詞を、ギターで伴奏をつけながら即興で曲にし、そのシャウ

トした内容を共有する時間にあてています。詞を作った学生自身が歌うのがもっとも理想的ですが、内気な学生が多いなかでそれは難しいことです。だから、ほかの学生に朗読してもらおうか、私自身が歌うことで、そのシャウト内容の存在を認め合うことを目指します。広いホール教室で、学生が歌詞を朗読し、そのBGMとしてアコースティック・ギターが鳴っていると想像していただければ、講義の雰囲気はお分かりになるでしょう。ブルースをBGMとしたポエトリー・リーディングと言ったほうがいいのかもかもしれません。

このブルースを軸とした自分詞ワークは、大学の講義だけでなく、市民講座などでも実践しています。昨年に引き続き、NPO・くにたち人間環境キーステーション主催の講座で、「歌の人間学」と題して、上記の自分詞作成&シェアのワークショップを11月に行う予定です。皆さん、近ごろ、ブルースは足りていますか。

最後に。声をかけていただければ、どこへでもギターを持って出かけていきます！講義やゼミのリフレッシュに。また近ごろシャウトの種が溜まっている方々のもとへ。ブルース・シャウトをお届けいたします。

(佐藤壮広bluesato2005@yahoo.co.jp)



仏教思想『唯識論』から深層心理での認識の本質を考察する

山田弘司

唯識論は、仏教教理の中では世間に余り馴染みのない仏説である。初期仏教から分化した論理的佛説である。他の、大乘仏教といわれる人間の平等性を捉える一乗菩薩思想と異なり、人それぞれ個別の機根により認識に違があるとした、現実に立脚した、資質の普遍的相違点を重視した教説である。仏教は、基本的に縁起による空観(結果は原因と媒体たる条件の和合で起きる)に基づく認識論・存在論・実践論であるが、変化する無常なる認識の限界、無我なる他との関りの中での存在の有限性を、修行を通してどう超越するのかを明らかにする教えが唯識論である。即ち、人間の心の有り様を、自己の認識と外部対象の存在との関係で捉え、外部に存在するとされたものは、すべてただ識のみであると唯心論的立場を取る。華嚴經十地品「三界唯心」(この三界は唯心のみである)に論拠を見る。唯識は、瑜伽という深い瞑想修行を通して、深層意識の中にある自己の心を観察して実態を極め、自己(我)や環境世界に存在する事象(法)の実在はなく、認識するのは縁起による仮の存在であり、固定的不変な実体の存在はないと説く。通常、外部環境の存在を認識する場合、知る主体(認識)と知られる客体が(対象)あって、知る側の主観によって分別して対象が実在すると考えられるが、唯識では、主体も客体もなくすべては虚妄であり、認識機能が外部から感受識別したものを表象(映像)として受け止め、言葉によって意味

づけられて、それを環境世界に投影し、心がそれを感覚・知覚する認識だけであると主張する。

心は、竜樹の中観論まで六識(眼・耳・鼻・舌・身・意)または五蘊(色・受・想・行・識)で纏められていた。唯識は、より体系化して深層の潜在意識まで認識を求めて行き、マナ識(自己性)とアラヤ識を立てて、人間の心の奥底にある無意識の世界を明らかにすることで過去世から現在、さらに未来までの人間の本質的な心を探り出した。

唯識は、心の構造を浅層と深層に分け、六つの浅層意識として、五根(肉体)から受ける前五識(眼・耳・鼻・舌・身)の感覚による認識機能と、表層の意識(第六意識)(情・知・意)、さらには、二つの深層意識として第七マナ識(自己中心的自我意識)と第八アラヤ識(人間の根源的存在=生命体)による八識二重構造を立てる。心は細分すれば、識・思・心に分割される。即ち、識は了別する浅層六識、思は自我に執着して思い計るマナ識、心は積集、過去を積み重ね、過去の影響を受ける人間の価値観・人格等の本性であるアラヤ識を示す。それらは、あい関連して刹那同時に生滅を繰り返し交錯ながら能動または受動する。即ち、現在の行為は、受動的に現在の経験因子(種子)として痕跡をアラヤ識に薫習収蔵され、アラヤ識に蓄積された過去の経験の因子(種子)は、能動的な心の働きで現行の行為として外部環境に現れ出る。現行薫種子 種子生現行の関

係にある。また、アラヤ識には、過去を収蔵すると共に、表層意識が中断しても間断しながら持続する面があるので、実体視され易く自我意識のmana識の拠り所ともなる。受動的であっても能動的であっても意識は、循環的にmana識を通過するので絶えず汚された心となり易い。すべての人間は、生まれてこの方の経験因子(新薫種子)と生まれる前からの遺伝因子(本有種子)が存在して現在まで継承され、さらに未来につながり永遠の存在となる。仏教は、靈魂の存在は認めないが、靈性としての種子は三世に跨ると考えては良い。靈性なる種子には、生命の一貫性が貫かれている。所詮、人間は過去を背負って生きて行くしかすべはないが、未来は、現在の心のあり方で規定される側面を持つ。過去は過ぎ去り、未来は到来していない。しかし未来を変えるのは、只、今しかない。種子は、mana識の分別意識、彼此の相対的思惟の元で無意識の内に我執が働く。阿頼耶識に関りを持つこのmana識で働く無明(煩惱)は、我痴・我見・我慢・我愛の四煩惱がある。しかも、潜在意識の中で恒に、細やかに思量する。要するに、唯識性認識の本質は深層の心であるアラヤ識とそれと一体となって働くmana識であると考えて良い。心の深層意識と関連する浅層意識の第六意識と前五識の関係説明は、字数の制約があり別に説明したい。

意識の本体(心王)は八識であるが、その

作用(心所)は六位51に分類される。心が働いている時は何時でもどの八識とも働く[遍行]の5(触・作・受・想・思)があり、個々又は複数と共に働く[別境]の5(欲・勝解・念・定・慧)がある。細かい個別的な心の働きは、[善]の11、[煩惱]の6[随煩惱]の20[不定]の4で説明される。

認識は、[遍行]の外部接触と作意から始まる。それが感受・表象・意思と伝わり意識となる。個別的には、意欲・理解・集中・思考判断など個々によってはそれぞれ異なる。これらを踏まえて善・悪(煩惱)等を定める。唯識は、キリスト教的な厳しい二者択一の価値判断でなく、善と悪、さらにそのどちらにも属さない性質(無記)、感性を含めて、有とする三性の存在を説いている。どちらかといえば曖昧さがあるが、それがまた人間的な暖かさがある。

現在、心を物質要素還元主義に基づく科学的な人間心理で考え、分別・細分され彼此が対立する世界となった。価値観は、お互いの利益が共通する部分しか関係を持たない。人間性の尊重よりも利害が優先して他を省みない自己中心的孤立な存在になった。自然との共生、神や仏の超越者に対する純粋な信頼と畏敬の念を失い、自己主張が強く、相互に信頼関係があるべき人間関係を断絶し、人間形成が出来ていない。今こそ、人間性を大切にする価値観、東洋の思想を見直すべき時と考える。

事務局からのお知らせ

研究発表会に合わせまして、宗教心理学研究会ニューズレター第7号が発行されました。今回の内容は、2つの特集から構成されております。会員がどのような立場から本研究会に関わっているのかを知る良い機会になればと考えております。また今後、さらにニューズレターを充実したものにしていきたいと思っておりますので、ぜひ第7号に関するご感想をいただければ幸いです。

11月下旬には、公開研究発表会が開催されます。その後、来年度の学会に関する企画準備を始める予定となっております。来年度は2つの学会への参加を予定しておりますので、今後も会員の皆さまのご理解とご協力をいただきながら、様々な研究会活動のお手伝いをさせていただきたいと思っております。これからも研究会に対する会員の皆さまからのご意見、ご感想をお待ちしております。

(K.M)

[宗教心理学研究会の今後の予定]

2007年11月

公開研究発表会『宗教心理学的研究の現在-2-』[於:白百合女子大学]

2007年12月

宗教心理学研究会ニューズレター第8号の原稿依頼

第6回研究発表会(日本心理学会第72回大会ワークショップ) テーマ・発表者の提案・検討
「宗教と社会」学会第16回学術大会テーマ・セッション テーマ・発表者の提案・検討

2008年1月

日本心理学会第72回大会ワークショップ申し込み

「宗教と社会」学会第16回学術大会テーマ・セッション申し込み

2008年2月

宗教心理学研究会ニューズレター第8号発行(予定)

公開研究発表会『宗教心理学的研究の現在-2-』のお知らせ

公開研究発表会を下記のように開催いたします。どなたでもご参加いただけます。お近くにご関心をお持ちの方がおられましたら、お声をかけていただければ幸いです。多数のご参加をお待ちしております。

日時 2007年11月24日(土) 14:00~18:00 【入場無料】

会場 白百合女子大学 2号館 2001号教室 〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25

◆研究発表

葛西賢太(宗教情報センター研究員)

『断酒自助会Alcoholics Anonymousにおける「靈性」—近代的自己の一つのありかたとして』

川島大輔(国立精神・神経センター精神保健研究所リサーチ・レジデント)

『死生の意味づけと宗教—人は死をどのように物語るのか?』

◆指定討論

星野 命(国際基督教大学名誉教授) —心理学の立場から

田畑邦治(白百合女子大学教授) —宗教学の立場から

井上順孝(國學院大學教授) —宗教社会学の立場から

発行: 宗教心理学研究会

編集: 宗教心理学研究会事務局

研究会事務局

担当: 松島公望 [psychology-religion@office.so-net.ne.jp]

研究会ホームページおよびメーリングリスト管理・運営

担当: 西脇 良 [rnishiwk@ps.nanzan-u.ac.jp]

研究会ホームページ

http://www.geocities.jp/psychology_of_religion_japan/